

# 第五十九福地「張公洞」と周辺地域の宗教関連遺跡の現況——宜興・南京・湖州・徳清を中心に

## 酒井規史

### はじめに

2017年9月7日から17日にかけて、筆者は江蘇省と浙江省において史跡と文物の調査を行った。本稿ではその際に訪れた、第五十九福地の「張公洞」の現況を報告したい。また、張公洞のある宜興のほか、南京・湖州・徳清の各地で実見した宗教関連の遺跡の現況についても述べてみたい<sup>1</sup>。

### 一、張公洞と洞靈観

#### (一) 張公洞の概要

張公洞は江蘇省宜興市の郊外、市街地の西南側約18キロに位置する孟峰山にある。三国・呉の時、大雨の後に洞窟が開いたと伝えられている。「張公」とは張陵のことであり、晋代の周処による『(陽羨)風土記』の逸文(南宋・史能之の『咸淳毗陵志』巻十五所収)では「漢天師張陵の得道の地」とされている。また、郭璞が「張公山洞」に言及しているという記事も残っている(同上)<sup>2</sup>。これらの記述には少し疑念もあるが、張公洞の存在は古くから知られていたようである。また、宋代には「張公」は張果を指すという説も行われていたらしい。

唐代になると、張公洞は七十二福地の一つとされるようになる。唐・司馬承禎の「天地宮府図」(『雲笈七籤』巻二十七所収)には、「第五十九張公洞。常州宜興縣に在り。真人康桑これを治む」とある<sup>3</sup>。福地の所在地、および康桑(庚桑楚のこと)が統括する地である事が述べられており、これが後世に踏襲されていく。唐末・杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』では「陽羨山。常州・義興縣・張公洞に在り」と記され、陽羨山という山名が付け加わっている<sup>4</sup>。

上述のように、唐代までには張公洞に張陵と庚桑楚が結び付けられていたようである。しかし、唐代までの両者の伝記資料を見ても、張公洞との関連は明確ではない。まず張陵の伝記資料を検討すると、成立の古い『神仙伝』(『太平広記』巻八所収)には、張公洞で修行したという記述は無い<sup>5</sup>。また、庚桑楚は『莊子』庚桑楚篇で老子の召使いとして登場するほか、『列子』仲尼篇では陳の国の聖人とされている。陳の国は現在の河南省や安徽省に相当するので、宜興とは地理的な隔りも大きい。現段階では、張公洞と張陵・庚桑楚がなぜ結びついたのであるのかは不明である。

唐代に福地として位置づけられた後は、張公洞は江南の主要な聖地として定着したようである。北宋・仁宗の時代、天聖四年(1026)に、宋朝は道教祭祀(投

注1…今回の調査には、森由利亜氏(早稲田大学文学学術院)にご同行いただいた(南京の朝天宮をのぞく。)この場を借りて、各種のサポートと写真の提供にお礼申し上げます。

注2…『咸淳毗陵志』巻十五(17a-18a)。『宋元方志叢刊』所収、中華書局、1990年。

注3…『雲笈七籤』巻二十七(15b)。

注4…『洞天福地嶽瀆名山記』(10b)。陽羨は宜興の古称。北宋・李思聰の『洞淵集』では第五十五福地となっており、陽羨山という山名は消えている。

注5…『太平広記』(中華書局、1961年)、55-58頁。

注 6…『東齋記事 春眠退朝録』（中華書局、1980年）、4頁。『統資治通鑑長編』巻一百四に「(天聖四年十二月)辛巳、道録院上所定名山洞府歲投龍簡者二十處、餘悉罷之。」とあり、投龍簡をする場所を道録院が定めたことが記されている。また、『清波雜誌』巻九にも、『東齋記事』と同じような記述がある。

注 7…『江蘇金石志』巻九。

注 8…宋代までの事績については、『(咸淳)毗陵志』巻二十五(10b)を参照した。

注 9…司馬承禎の活動していた天台山の桐柏観のことを記した唐・崔尚の「唐天台桐柏観碑」(『金薤琳琅』巻十五所収)の立石者である、「毗陵道士・万恵超」と同一人物と思われる。

注 10…『旧唐書』では「洞虚真人」となっているが、これは書き間違いであろう。

注 11…『(咸淳)毗陵志』以外の資料では、劉敖が洞霊観で入道したことは記されていない。

注 12…劉敖(劉能真)の事績については、劉敖みづから記した「潮建通元(玄)観記」(『両浙金石志』巻九、11a-12b)を参照した。

注 13…『重刊宜興県旧志』、

龍簡)を行う費用と負担の軽減のため、二十箇所の聖地を選び、ほかのところでは祭祀をとりやめることにした。北宋・范鎮の『東齋記事』巻一にはその際に選ばれた聖地が列挙されているが、その中に「常州張公洞」も含まれており、当時重視されていたものと思われる<sup>6</sup>。北宋・治平四年(1067)の「王説投龍記」には、皇帝の詔によって投龍簡が行われたことが記されており、実際に祭祀が行われたことが分かる<sup>7</sup>。

## (二) 洞霊観の概要

張公洞近くに建てられた道観が洞霊観である。『咸淳毗陵志』によると、唐代以前は仏寺であった<sup>8</sup>。唐・開元の初め、万恵超が投龍簡を行ったという。なお、この万恵超は司馬承禎とつながりがあったようである<sup>9</sup>。

天宝元年(742)、老子を祖とする唐朝は道家の思想家たちを顕彰し、庚桑楚の著作とされる『亢倉子』が『洞霊真経』とされ(『新唐書』巻五十九・芸文志)、庚桑楚も「洞霊真人」と賜号された(『旧唐書』巻九・本紀。)\*<sup>10</sup>それにちなみ、道観の名前も洞霊観として定着していく。張公洞が聖地としての地位を確立すると同時に、洞霊観も祭祀の場所として機能したものと思われる。

その後、南宋の宦官・劉敖がここで出家したことで、洞霊観は転機を迎えることになる<sup>11</sup>。劉敖は紹興二十年(1150)、高宗の命で杭州・呉山の寧寿観の住持となり、同時に「能真」という法名を賜った<sup>12</sup>。高宗と密接な関係を持っていた劉敖(劉能真)は宋朝に要請し当時の道観の最上級クラスである「宮」に格上げすることに成功した。その結果、乾道六年(1170)に天申万寿宮と賜額された。

元代の詳しい状況は不明であるが、当時、龍虎山の張天師を頭目とする正一教・玄教の道士たちが隆盛を誇っていた時代であり、初代張天師にゆかりがある洞霊観も手厚い保護を受けていたと推測される。その後、元末には廃れたが、明・洪武二年(1369)には陳清源なる道士によって再建された<sup>13</sup>。しかし、宗教活動は下火になっていったようである。

清代の康熙年間にはまた再建をはたし、朝陽道院と称されるようになった<sup>14</sup>。この名称は、再建を主導した道士の潘朝陽の名に由来するものである。潘朝陽は人の吉凶を予見する能力を持っていたという。なお、現在、洞霊観の入口付近の碑亭には、「朝陽道院開山碑記」という石碑が残されている。

## (三) 張公洞と洞霊観の現況

現在、張公洞と洞霊観は風景区として観光地化されている。1934年、地元の名士である儲南強によって付近の善卷洞(後述)と同時に洞窟内部を整備されたのが、近代的な開発の始まりであったらしい<sup>15</sup>。その後、1982年には張公洞は重点名勝風景区に指定され、2006年には文物保護単位とされている。

1994年には政府から宗教活動の許可があり、それをうけて翌年の1995年には洞霊観が再建されたという。

張公洞と洞霊観の位置関係を簡単に述べると、両者とも同じ山に存在している。山の正面（風景区の入り口）から見ると、左側の山腹に張公洞の入口、右側に洞霊観の入口がある。（図1）張公洞は山腹の内部に広がっており、洞霊観は山に沿って建物がいくつか建てられている。（図2）洞窟の出口は山の頂上にあるが、そこで洞霊観の最上層とつながっている。

張公洞に入ると、まず横長のホールのような洞窟（下洞）がある。（図3・4・5）そして、さらに奥に入っていくと、さらに巨大なドーム型の洞窟（上洞）が広がっている。最初の洞窟もかなりの大きさであるが、内部の洞窟はさらに規模が大きい。洞窟の大きさだけでいうならば、筆者が以前に訪れた金華の洞窟にも匹敵する、最大級の規模のものであった。

この内部の洞窟は「海王庁」と称され、簡単に言うと講堂や階段教室のような作りとなっている。（図6）洞窟の入口から見て左手側が平板となっており、右手側は傾斜していて階段状になっており、徐々に出口に向かって登るような形で整備されている。階段状になっている側には、大きな石像がいくつか立てられていた。「八仙渡海」の故事などをイメージして神像が作られているとのことであるが、見たところ八仙が揃ってはいなかったようである。

洞窟はまだ整備中という印象であり、照明も暗く、それほど内部を散策できるわけではない。また、唐宋五代の杜光庭や元の楊維禎など著名な道士や文人による題刻が残されているようであるが、それらも確認することはできなかった。

上洞の上方を仰ぎ見ると、洞窟の一か所に穴が開いており、太陽の光が射し込んでいる。そこが洞窟の出口である。その出口までは少し勾配のある数層の丘のようになっており、洞窟内部の階段を上っていくと辿り着く。（図7）その出口からさらに少し階段を上ると、洞霊観の最上部にある三清殿の横に出ることができる。

洞霊観は上述のように山腹に沿って建てられた、複数の殿宇によって成り立っている。（図8）筆者の知る限りでは、同じような構造を持つ道観には陝西省の樓観台がある。山門から登っていく順に、一層めに靈官殿（王靈官と四神）、二層目に真人殿（洞霊真人＝庚桑楚）（図9）・長生殿（福祿寿）・天師殿（張陵と王長・趙昇 図10）、三層めに玉皇殿、最上層に慈航殿（観音）・財神殿（財神）・八卦亭（老君）・三清殿（三清 図11）が配置されている（カッコ内は祀られる神仙。）三清殿と洞窟の出口がつながっているのは、先に述べたとおりである。

三清殿には道士がおり、儀礼などを行っているようである。洞霊観には宜興市道教協会の事務所が置かれていることもあり、派手さはないがきちんと整備

巻末 35a。『中国方志叢書（華中地方・江蘇省）』所収（成文出版社、1989年）。

注 14…『重刊宜興県旧志』、巻末 35a。

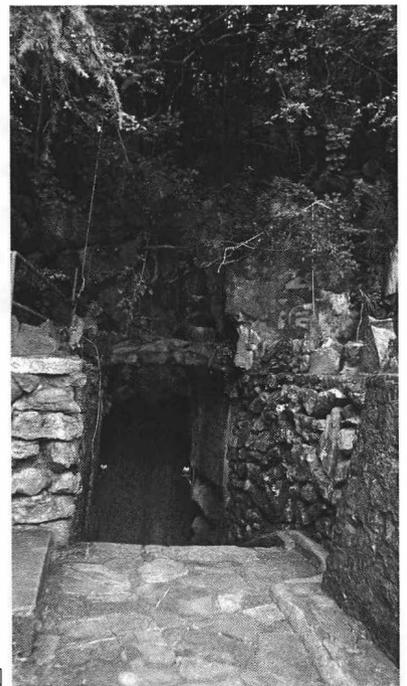
注 15…以下、近代以降の張公洞の状況については、宜興市道教協会がいただいた、宜興市張公洞景区管理有限公司編『張公福地』（2012年?）という冊子を参照した。



1 張公洞と洞靈観の入口に至る階段



2 洞靈観の遠景。山腹に沿って建てられている



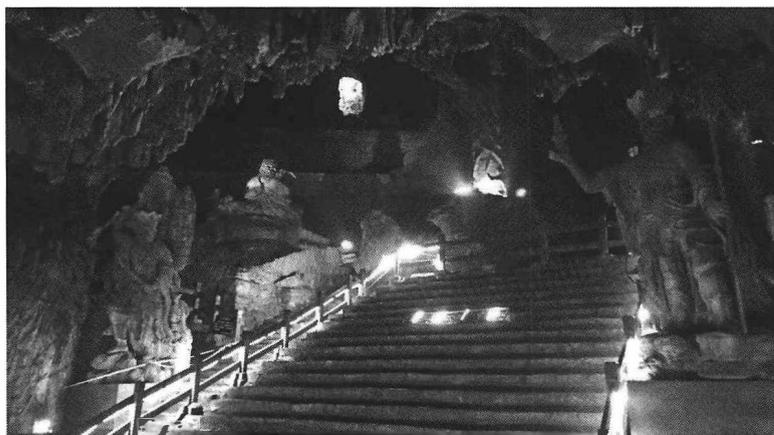
4 張公洞の入口



3 張公洞の門



5 張公洞の下洞



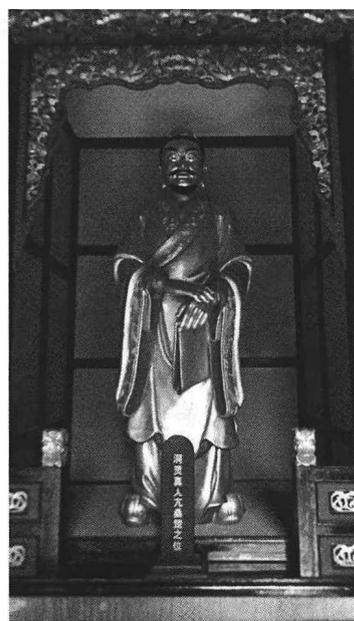
6 張公洞の上洞。上側を見ると、出口から光が差しているのが分かる



7 張公洞の出口。階段を上っていくと、洞霊観の三清殿の脇に出る



8 洞霊観の入口。階段で山頂まで登ることができる



9 天師殿の張陵の像



10 真人殿の庚桑楚の像

されているという印象を受けた。三清殿の前には願掛けの赤い布が幾層にも巻き付けられていたが、それらの大半は張公洞の観光客が購入して巻いたものと思われる。観光地と併設された道観としても機能していることが分かる。また、三清殿以外の建築はあまり整備されていないものの、最近作られたとおぼしき神像が置かれており、洞霊観が安定した活動をしていることがうかがえた。

#### (四) 宜興市道教協会でのインタビュー

洞霊観の山門近くには宜興市道教協会の事務所があり(図12)、副会長である陳文健(法号:澹健)氏にお話をうかがうことができた。(図13)突然の来訪にもかかわらず、時間をとってお答えいただいたことに感謝したい。以下、陳氏からお聞きしたことを列挙する。

- ・宜興市では十六名の道士が活動している。
- ・句容・麗陽・宜興の出身で、下は三十代から上は八十五歳まで様々な年齢の道士がいる。
- ・そのうち、四十代から五十代にかけての年代が一番多い。
  
- ・活動の拠点となる道観は七つあり、その一部は全真教である。
- ・各道観に道士がそれぞれに二、三名所属している。
- ・陳道長みずからは、正一教に属していると自己認識している。龍虎山とも交流があり、受籙をしている。
- ・協会内では茅山で育成された道士たちもおり、彼らには上清派という意識もあるという。
  
- ・3月と4月には「道教文化節」を開催している。
- ・周辺地域の道観とも交流があり、特に無錫とは密接な関係を持っている。
- ・香港の青松観との交流はあるが、台湾とは接点が無い。

#### (五) 善卷洞

張公洞の西北側に車で15分行ったあたりに、もう一つの巨大な洞窟、善卷洞(善乾洞と称す場合もあり)がある。(図14)周の幽王二十四年(存在しないので係年の間違いか)に洞窟が開いたとされ、歴代の文人も訪れている名勝である<sup>16</sup>。張公洞と同じく、二十世紀に入ってから儲南強によって観光開発された洞窟であり、宜興市の風景区にも指定されている。(図15)なお、梁山泊との恋愛物語で有名な、祝英台の故居が善卷洞にあったとされており、それにちなんだ観光開発もされている。

上洞・下洞と別れており、まず上洞から洞内に入っていく。上洞は平たいホー

注16…『(咸淳)毗陵志』  
卷十五、18a-b。



11 頂上にある三清殿。向かって左側に張公洞の出口がある



13 宜興市道教協會の陳文健氏と。右は森由利亞氏、左は筆者



12 宜興市道教協會



14 善卷洞の入口の門

ル状の洞窟である。そこから階段で下洞に下りると、上洞入口付近にある滝の下にいったん誘導される。(図 16) その後、戻っていくと地下河川があり、船に乗って出口の近くに達する。張公洞に匹敵するか、もしくはそれ以上の規模を持った洞窟であり、その巨大さには圧倒された。

## 二、宜興の宗教関連遺跡

### (一) 周王廟（宜興碑刻博物館）

周王廟は晋代の周処（236～297）を祭祀する廟である。(図 17) 周処は宜興出身の武将で、最古の地方志ともいわれる『(陽羨) 風土記』を記した人物である。(図 18) 宜興でも唐代に廟が作られた後、代々祭祀が続けられてきた。

周王廟は現在、宜興碑刻博物館として開放されており、廟の中の碑廊に唐代から清代に至るまで多くの石碑が保存されている。今回に訪問した際にも、唐・陸機の「平西將軍周府君碑」(図 19) や南宋・蕭德藻の「重修英烈廟記」をはじめとして、歴代の石碑を実見することができた。

これらの石碑を見ると、宜興の人々が周処を祭祀し続けてきたことが分かり、地元の英雄として求心力を持っていたことが実感できる。また、これだけ通時的に廟に関連した石碑の実物が残っている例は貴重であり、民間信仰の研究にとっても重要な資料群であるといえよう。

### (二) 文昌閣

宜興の市街地、汎濱広場の一角に文昌閣がある。(図 20) この文昌閣はもともと通真観という道観の一部だったのを移築したものである。『咸淳毗陵志』<sup>17</sup>によれば、通真観は陳の太建二年（570）の創建で、もともとは弘道観という名であった。唐の神龍年間、興道観と改称し、北宋の大中祥符二年（1007）には玄道観と賜額された。さらに、宋朝の伝説的な始祖である聖祖・趙玄朗（真宗時代に「天書」を下したとされる）の避諱で通真観と改称し、以後はその名称が定着した。

南宋・紹興の末に、道士・焦善淵の要請で杭州・寧寿観の支院となる。寧寿観は上述の劉能真が住持となった杭州の道観であり、中央とのつながりを維持するための措置と考えられる。また、嘉定の初め、道蔵を収めるための経蔵を建てたというから、それなりの規模を持った道観であったようである。

その後、元代から清代にかけては興廃を繰り返す、通真観は残されていない。ただ、偶然であるが、今回宿泊した宜興国際飯店は「通貞観路」にあり、おそらく通真観（貞と真は音が同じ）が付近にあったと思われ、現在の宜興市の人民医院の周辺に位置していたようである。市街地の中心に位置していることから、地域の中心的な道観として機能していたと考えられる。

文昌閣は明代の万曆十二年（1584）に道士の談円慧が寄進を集めて建築され、

注 17…『(咸淳) 毗陵志』  
巻二十五、10b-11a。



15 儲南強の像



16 善卷洞の下洞。女性二人と比較すると大きさが分かる



17 周王廟の入口



18 周処の像



19 唐・陸機「平西將軍周府君碑」

注 18…明代以降の沿革については、『重刊宜興県旧志』、巻末 (11b-12b) を参照した。

注 19…以下、明代までの朝天宮の沿革については、『金陵玄観志』巻一 (1a-2a) を参照した。『統修四庫全書』第七一九冊、上海古籍出版社、2002 年。

注 20…清代以降の朝天宮の沿革については、南京市博物館編『勝迹千年—朝天宮歴史沿革展』 (出版年不明) を参照した。

清代には再建されている。<sup>\*18</sup> 現在の建物をみるかぎりでは、さらにその後大幅に修復されたものと思われる。(図 21) 訪問した際には、宜興における科挙の歴史をふりかえる展覧会が行われていた。

### 三、朝天宮 (南京)

南京の市街地にある朝天宮は、明代初期の道教界の中核となる道観であった。(図 22) 現在、遺跡は開放され、一部は南京市博物館として使用されている。

朝天宮の道観としての前身は、五代十国・呉国の紫極宮である<sup>\*19</sup>。紫極宮は唐代に各地に創建された老子祭祀のための道観であり、呉国もそれを継承したようである。その後、宋代に天慶観となり、元代には (宋代の遺風を廃するため) 玄妙観と改称された。各地に存在する、オーソドックスな都市型の道観といえよう。

その後、元の至順元年 (1330)、玄妙観は大元興永寿宮と賜額される。これは皇太子時代の文宗が金陵に滞在していた際、玄妙観の道士である陳玉琳 (陳寶琳) と趙嗣祺との間に交流があり、文宗が即位した後に実現したものである。「観」から「宮」に格上げされたことから、その勢力が大きかったことがうかがえる。

趙嗣祺は当時の有力な道士であり、玄教の宗師や張天師といった、龍虎山系統の道士のリーダーたちとも協力関係を築いていた (趙嗣祺については後述)。大元興永寿宮は地域有数の道観となり、崑山の崇福観と玄真観を支院にするまでになった。

明代に入ると、大元興永寿宮は朝天宮と改称され、道教を管轄する衙門である道録司も設置された。明朝は南京に首都を置いたため、南京は明朝の宗教活動の中心にもなった。そのため、明初の主要な道士たちも朝天宮で儀式などの宗教活動を行った。元代の状況を引き継ぐように、龍虎山出身の道士たちが中央に進出する際の活動拠点のひとつとなった。

その後、天順五年 (1461) に焼失し、成化六年 (1470)、礼部尚書の鄒幹が、右玄義の李靖観を住持に推薦し、その際に大々的な改修がなされた。明代には、城内の靈応観・盧龍観・洞神宮、城外の仙鶴観・朝真観・洞玄観・玉虚観・祠山廟・移忠観・祐聖観を管轄する、南京の中核的な道観としても機能していた。

続く清代でも朝天宮は南京を代表する道観であり、康熙帝や乾隆帝が訪れたこともある<sup>\*20</sup>。同治五年 (1866) には曾国藩によって孔子廟に改築され、江寧府学も中に移転した。現在の遺跡にある建築も道観ではなく、孔子廟の形式となっている。また、道士もおらず、宗教活動は行われていない。

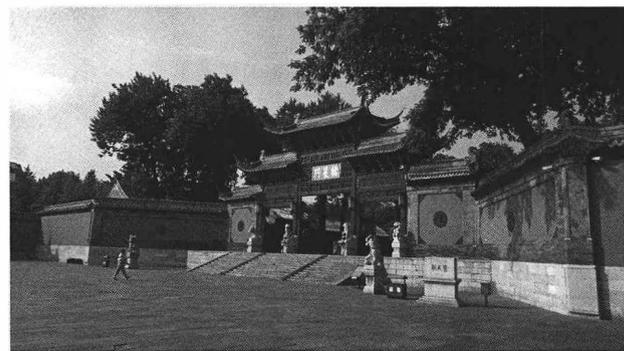
遺跡内には「奉敕重修朝天宮碑」が残されているが、碑石は摩耗して文章は判読不可能な状態である。(図 23) また、上述のように現在は南京市博物館と



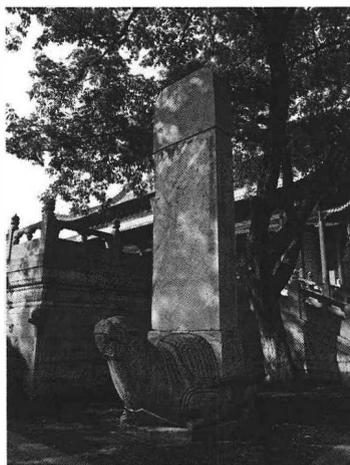
20 文昌閣の入口



21 文昌閣と孔子の像



22 朝天宮の門



23 明・商輅「奉敕重修朝天宮碑」

注 21…龍門派の系譜については、森由利亜「全真教龍門派系譜考」（道教文化研究会編『道教文化への展望』所収。平川出版社、1994年）を参照。また、金蓋山の龍門派については、以下を参照。森由利亜「呂洞賓と全真教—清朝湖州金蓋山の事例を中心に—」（砂山稔・尾崎正治・菊地章太編『講座道教 第一巻』所収。雄山閣出版、1999年）、王宗耀「湖州金蓋山古梅花観志」（内部資料、2003年）、モニカ・エスポジト著、梅川純代訳「清代道教と密教：龍門西竺心宗」（麥谷邦夫編『三教交渉論叢』所収。京都大学人文科学研究所、2005年）、高万桑（Vincent Goossart）「金蓋山網絡：近現代江南全真居士組織」（『全真道研究』第一輯所収。齊魯書社、2011年）、Monica Esposito, *Creative Daoism*, Paris: University Media, 2013。また、龍門派の湖州への伝播については、呉亜魁『江南全清道教（修訂版）』（上海古籍出版社、2012年）と尹志華『清代全真道歴史新探』（香港中文大学出版社、2014年）も参照した。

注 22…古梅花観の沿革については、『金蓋心灯』所収の関一得「金蓋山純陽宮古今蹟略」（杜祥潔主編『道教文献』第十一冊。丹青圖書有限公司、1983年、827～846頁）と、上掲の金蓋山の龍門派に関する先行研究を参照した。

しても使用されており、朝天宮とならんで明初南京の主要な道観であった神楽観の石井が展示されている。（図 24）なお、南京の白馬公園の一画は南京石刻博物館となっており、明代のものを中心に各種の碑や神道の石像が展示されている。その中に、神楽観に立てられていたはずの「神楽観澧泉碑」もある。（図 25）残念ながらこの石碑も保存状態はあまりよいものではなく、判読は難しい状態であった。

#### 四、金蓋山古梅花観（湖州）

湖州郊外の古梅花観は、全真教龍門派第十一代の関一得が活動の拠点とした道観である。（図 26）龍門派は、全真教の始祖・王重陽の直弟子のひとり、丘処機を祖とする一派である<sup>21</sup>。清代に第七代の王常月が活躍し、北京の白雲観をはじめとする各所で戒律を伝授し、龍門派の勢力を拡大させた。関一得もその流れに連なる一人である。

関一得は幼少時に病弱であり、九歳の時に父親の命で龍門派の高東籬に弟子入りし、導引の術を習う。その後、高が仙去したため、高の弟子（つまり兄弟子）の沈一炳に師事した。その後、金蓋山で修行し、住持の代わりもするが、雲南で官職に就く。父の喪に服するため金蓋山に戻り、さらに母を亡くした後、官職に復帰せずに金蓋山を復興する道を選んだ。その後、古梅花観を拠点として教線を拡大していった。また、その編著である『金蓋心灯』は龍門派の道士の伝記を集めたものとして有名である。

古梅花観は、陸修静が隠居した場所であり、梅の花を植えて楽しみとしたと言い伝えられる<sup>22</sup>。その後の北宋時代、呂洞賓が湖州の沈思の家に出現し、呂洞賓の銅像を祀るため、沈思が齊仮龕を作った。その後も、数々の道士などの隠居の場所となった（関一得の祖先も元代に隠居）が、興廃を繰り返していたというのが実態のようである。一時は仏僧がいたこともあるらしい。

龍門派の道観となったのは、王常月から受戒した陶守貞と黄守元が金蓋山に隠居したことに始まる。陶守貞は金蓋山を復興させようとするが、志半ばにして亡くなり、一族の陶太定が事業を継承するも、こちらも成功しないまま終わる。その後、関一得により復興し、江南における龍門派の拠点の一つとして地位を確固たるものにした。古梅花観を総壇として、周辺にも多くの分壇が形成された。

古梅花観は湖州の市街地の南にあり、タクシーに乗って 40 分ほどで到着した。訪問した際、古梅花観は改修（再建？）工事中であり、建物を取り壊し始めているところであった。（図 27）もう少し時期がずれていたら、調査も不可能であったかもしれない。数年後にはリニューアルしていると思われるので、2017 年時点での様子を書き記しておくのも価値があるろう。



24 神楽観の石井



25 明・胡広「神楽観濃泉碑」



26 古梅花観の門



27 古梅花観の門を別角度から（森氏撮影）

古梅花観はなだらかな丘に沿って、二階に分かれている。(図 28) それぞれの階はいくつかのエリアに区切られ、神仙が祀られていた。普通の道観であれば平地に展開している各種の殿宇が、一か所に凝縮されているといえれば分かりやすいであろうか。

一階には五祖殿・呂祖殿・丘祖殿(山門から向かって左から右)、二階には観音殿・閔帝殿・玉皇殿・財神殿・太乙(天尊)殿・斗母殿・財神殿(同上)がある。一見して分かる通り、一階は呂祖と龍門派の祖師たちを祀っており、二階は一般的に人気のある神々を祭祀している。古梅花観の特色を示すのは、やはり一階であろう。とりわけ、五祖殿は閔一得と古梅花観にゆかりの道士たちを祀っていて興味深い。

ここでいう「五祖」とは、高東籬・陶太定・閔一得・陶守貞・沈一炳(正面左から右)を指している。(図 29・図 30・図 31) 上述の通り、高東籬と沈一炳は閔一得の師、陶守貞は王常月から受戒し、龍門派の流れを古梅花観にもたらした人物、陶太定は古梅花観の運営を継承した人物である。

古梅花観のすぐ近くにある玄帝閣には、三清・玄天上帝・張天師・孫思邈が祭祀されていた。二階と同じく一般的に信仰される神格を祭祀しており、龍門派というよりは正一派といった趣であった。また、丹桂苑という建物があり、古梅花観の管理委員会が置かれ、道士の研修所としても使われているようである。

道士への簡単なインタビューも行った。現在、古梅花観には六、七名の道士が在籍しているという。家から通っている場合もあるが、それは在家・出家を問わなかった閔一得の方針を継承しているからだそうである。また、七十二か所の分壇があるが、そのことを認識していない信者もいるという。正一派や近隣の仏寺とも交流しているとのことであった。

## 五、徳清の道観と廟

徳清県は湖州と杭州のちょうど中間に位置している。高速鉄道の駅もあるが止まる本数は少なく、開発途上という印象であった。徳清県における道教の活動は、大躍進・文化大革命の後で途絶えていたようである。最近出版された地方政府編纂の『徳清県志』においても、道教の項目は立てられていない<sup>23</sup>。しかし、二十一世紀初頭から徳清県の道教は徐々に復興しはじめている。今回、徳清県の三つの道観と、一つの廟を調査することができた。それぞれの沿革と現況を以下に述べていく。

注 23…徳清県地方志編纂委員会編『徳清県志』(浙江人民出版社、2015年)

### (一) 烟霞観

烟霞観は徳清の市街地にある唯一の道観である。(図 32) いくつかの WEB



28 古梅花観の一階部分



29 五祖殿。中央は関一得



30 五祖殿。高東籬と陶太定



31 五祖殿。陶守貞と沈一炳

注 24… <http://life.zjrxz.com/html/20170508/779675.shtml> (2018年2月26日閲覧)など。この記事によれば、歴代、様々な流派の道士が住持をして、大躍進の時期に廃されたという。しかし、何に基づく記述かは不明である。

注 25…明・程嗣功(修)、明・駱文盛(纂)『武康県志』(嘉靖二十九年刊本)巻三(6a-b)。『天一閣蔵明代方志選刊』第二十冊所収、上海古籍書店、1982年。

サイトによれば、烟霞観は南宋時代に創建された道観とされている<sup>24</sup>。しかし、各種の資料を見るかぎりでは、烟霞観の由来ははっきりしない。

烟霞観の名前は、宋の劉士穎の別荘と伝えられる「烟霞塢」に由来するのは間違いなさそうである。その別荘は「烟霞洞天」とも称され、武康県の景勝地の一つとして知られていたという<sup>25</sup>。しかし、そこに道観が建てられたという記録はなく、清代までの地方志を見ても、烟霞観に該当する道観を見いだせない。現段階では具体的な沿革は不明である。

烟霞観は徳清の市街地の東南側、塔山森林公園の中にあり、タクシーで簡単に行くことができる。現在、烟霞観はメインの玉皇殿が改修工事中であり(図33)、観音殿などで宗教活動が行われているようである。(図34)現地を訪問した際は、ちょうど『北斗経』の読経を行っているのを見ることができた。(図35)今回調査したかぎりでは、徳清で道士が常駐している道観は烟霞観のみであり、これからの道教の復興に中心的な役割をはたすと思われる。

烟華観の法事組組長である宣文輝(道名:宣羅振)氏に少しお話をうかがうことができたので、以下に簡単に記しておく。突然の訪問にもかかわらず、情報を提供していただいた宣道長にこの場をお借りしてお礼申し上げる。なお、徳清のほかの道観についても情報を提供していただいたが、それは各道観の項目で記すことにする。

- ・烟華観は正一教の道観であるが、全真教の道士も在籍している(読経の儀式を行っていた道姑は全真教とのこと)。
- ・現在は10人ほどの道士が在籍している。龍虎山で受籙している場合が多いが、茅山と関係がある者もいる。
- ・武漢の長春観や北京の白雲観とも連絡を取っている。
- ・宗教活動は陰陽ともにあり、死者救済の儀礼と招福の儀礼のどちらも行う。
- ・それぞれの儀礼の時によって道服の色も青・黄・赤などに変える。
- ・三元日の祭祀、玉皇大帝や観音の祭祀も行っている。
- ・現在、徳清の複数の道観が復興に向けて活動しているのは、たまたま時期が重複しただけである。それぞれの道観にもともと復興の兆しはあった。

## (二) 昇玄観(昇元報徳観)

昇玄観は徳清の南部、市街地から30分ほどの三合郷上楊村にあり、ほぼ杭州市との境目に位置している。地図アプリにも場所が示されており、思ったよりも簡単にたどり着くことができた。(図36)

南宋・談鑰の『吳興志』巻六などによれば、紹興二十六年(1156)、南宋の將軍・楊存中が創建し、祖慶章が招かれて住持をつとめた<sup>26</sup>。付近の施渚鎮

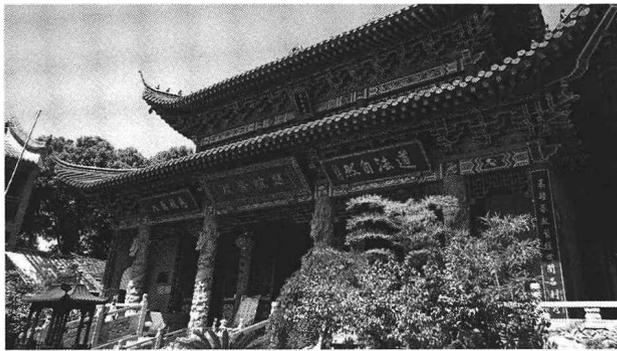
注 26…南宋・談鑰『吳興志』巻六、3a-b。『宋元方志叢刊』所収、中華書局、1990年。



32 烟霞觀



33 改修中の玉皇殿を背後から撮影



34 観音殿



35 読経の儀式。一番左側は道姑（女性道士）

にあった玄真観の廃額を移籍したというから、当初の名前は玄真観だったようである。乾道二年（1166）、太上皇（退位した高宗）が行幸し、その後に昇元報徳観と賜額された。

南宋時代、太上皇が行幸に訪れるほどであるから、すでに地位を確立していたようであるが、元代に活躍した大物道士である杜道堅が住持になったことで最盛期を迎える<sup>27</sup>。杜道堅は杜預の後裔を自称し、十四歳で異人から伝授を受けたという。茅山で修行し、第三十八代宗師の蔣宗師から上清経を伝授された。その後、昇元報徳観に招かれて住持になった。教理の研究を行い、清規を整備して、道観を盛り立てたという。

その後、世祖フビライから江南の人材を捜すよう命を受けるなど、朝廷とのつながりも強くなっていく。当時隆盛を誇っていた玄教の宗師である張留孫や呉全節たちからも信頼され、杭州の宗陽宮の住持となり、大徳七年（1303）には「杭州路道録・教門高士」となった。さらには杭州の四聖延祥観の住持も兼任し、重建に貢献したという。引退する際、弟子の姚志恭を昇元報徳観の提点、法孫の孫拱真を提挙にした。有名な文人である趙孟頫も杜の「高第弟子」のひとりであり、杜のために石碑を記している。

さらに、もう一人、元代の大物道士である趙嗣祺もこの道観に在籍していた<sup>28</sup>。趙は師の張徳懋により銭塘へ遣わされ、杜道堅に宗陽宮で面会し、趙は昇元報徳観に派遣されることになった。昇元報徳観の住持である姚季安が死去したのち、その地位を継承した。趙は杜と同じく玄教の宗師たちと強いコネを持ち、江南の人材を推挙する役割を担った。また、各地の聖地で皇帝の代理となって祭祀を行うなど、やはり元朝と密接なつながりを持つ道士であった。当時、昇元報徳観も手厚く保護されていたものと推測される。

その後、昇元報徳観は元末には戦乱により焼失してしまい、明・洪武二十五年（1392）に袁居安によって再建された<sup>29</sup>。その後の状況は資料が不足しており不明であるが、清代の康熙六年（1667）には余体崖によって再度復興されたという。1928年に刊行された『計籌山志略』に収録されている各種資料によると、余体崖は銭塘の人で、全真教龍門派の中興の祖である王常月から戒律を伝授されたという。余は全真教龍門派の第八代の派名（「守」淳）を持っており、弟子の派名にもみな第九代の「太」の字が含まれていることから、全真教龍門派の道士であったことが分かる。その後の昇元報徳観は、民国期に至るまで全真教龍門派の法統につながる道士たちに運営されていたようである。つまり、もともと龍虎山（正一教・玄教）と関係が強かったのが、全真教に取って代わられたわけである。

烟霞観の宣道長によると、今の昇元報徳観（現在は昇玄観と称されている）もやはり「全真」に分類されているとのことであった。現地を訪れた際には道

注 27…杜道堅の事績と元代の昇元報徳観については、戴元表「計籌山昇元報徳観記」（『剡源集』巻五）と趙孟頫「隆道冲真崇正真人杜公碑」（『松雪齋集』巻九）を参照した。

注 28…趙嗣祺の事績については、陳性定編集、呉明義校正『仙都志』巻下（2b-3a）、陳旅「崑山州崇福観記」（『安雅堂集』巻八）、黄𠄎「玄明宏道虚一先生趙君碑」（『金華黄先生文集』巻二十九）、虞集「處州路少微山紫虚観記」（『道園学古録』巻四十六）、虞集「仙都山新作玉虚宮碑」（『道園学古録』巻四十八）を参照した。

注 29…明代以降の沿革については、呉亜魁『江南全真道教（修訂版）』（174～178頁）を参照した。

士はおらず、老人が一人で留守番をしていた。(図 37) 老人によると道士がいるとのことであった。道観内部の机の上にはお札やお香、蠟燭や紙銭などが置いてあり、宗教活動は行われているようである。(図 38) しかし、建物はコンクリ造りで道観のように見えず、神像も大きくはなく、活動の規模はそれほどではないと思われた。なお、宣道長によると上述の趙孟頫の石碑が近くに残されているとのことであったが、時間不足のため調査することはかなわなかった。

### (三) 紫極観(徳清)

紫極観は徳清市の西部、乾元鎮幸福村にある。徳清の市街地からは一時間弱といったところであろうか。

南宋・談鑰の『呉興志』巻六によれば、紫極観は梁・大同七年(541)に創建された<sup>30</sup>。沈文仲が、呉興の太守であった曾祖の沈道思が道教信仰を持っていたことにちなみ、祖父の旧宅を喜捨して道観にしたという。当初は太玄観と称していたらしい。唐代には中岳の道士である沈法謙が銅鐘と醮壇を喜捨したというが、中岳との関係は不明である。その後、北宋・治平二年(1065)に紫極観と改称し、その名称が今も使われている。

その後、元・至正年間に兵火で焼失し、明・洪武の初めに再度復興したという<sup>31</sup>。さらに、清代の光緒十二年(1886)から数年かけて復興され、その際に呂祖の像と鸞壇が設置されたという。詳細は不明であるが、呂祖信仰の道壇として再生したようである<sup>32</sup>。

烟霞観の宣道長によると、紫極観もやはり「全真」の道観ということであった。それは清代に呂祖信仰を中心にして復興した名残と思われる。現在の紫極観は復興の途中であり、道観の建物もコンクリ造りで道観というよりは街工場のような印象を受けた。(図 39) 道士の服が干してあったものの、訪れた際には無人で話を聞くことはできなかった。また、寄進者リストも見受けられ、一定数の信者もいるようであるが、祀られている神像も大きなものはなく、細々と活動している様子がうかがえた。また、戯台があつて椅子が積まれていたので、演劇も行われているようである。(図 40)

事務所(?)の掲示や看板から見るとリニューアルする計画があるようで、靈官殿・紫微大殿・斗母殿から成る完成予定図が掲げられていた。数年後に再訪したら面目を一新しているかもしれない。

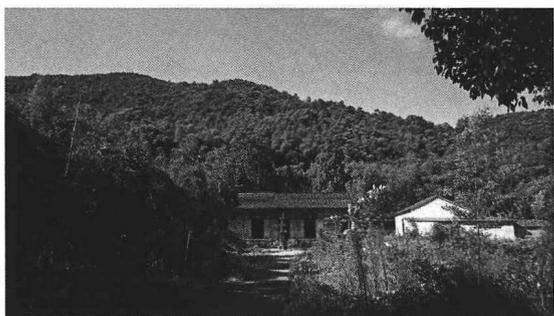
### (四) 防風祠

夏の時代の伝説的な人物である、防風氏を祀る廟が防風祠である。(図 41・図 42) 防風氏の領地が現在の徳清のあたりとされていたことに由来する。晋

注 30…以下、北宋までの沿革については、南宋・談鑰『呉興志』巻六(3b)を参照。

注 31…元代以降の沿革については、清・侯元斐(修)、清・王振孫等(纂)『徳清県志(康熙十二年鈔本)』巻三を参照。『中国方志叢書(華中地方・浙江省)』所収本、158頁。

注 32…吳騫等(修)、程森(纂)『徳清県新志(民國二十一年本)』巻三、23a。『中国方志叢書(華中地方・浙江省)』所収。



36 昇玄観の遠景



37 昇玄観の外観



38 昇玄観の内部



39 紫極観の外観



40 紫極観の内部。人形劇用の人形(?)



42 防風氏の像



41 防風祠の外観

の元康年間に廟が立てられ、唐の元和年間に再建された<sup>\*33</sup>。

さらに後唐・長興二年（931）に呉越国の初代国王・錢鏐が廟を再建しており、その際に自ら記した「新建風王靈徳王廟記」が知られている。なお、その文を刻んだ石碑は、現在も防風祠の前に保存されている。（図 43）

注 33…南宋・談鑰『呉興志』  
卷十三（十七 a-b）。

注 34…徳清県地方志編纂  
委員会編『徳清県志』。

防風祠は市街地の東南にあり、中心部からもタクシーに乗れば二十分ほどで到着する。現在の防風祠は、観光地のランドマークといった趣である。周辺は飲食店街が作られ、郊外の歓楽地として開発を進めているようであった。廟もそれに合わせて瀟洒でモダンな建築として整備されていた。なお、旧暦の八月二十五日が防風氏の祭日とされており、廟会が開催されるようである<sup>\*34</sup>。

### おわりに

以上、第五十九福地の張公洞、および宜興・南京・湖州・徳清の宗教に関連する遺跡について、その現況を報告した。さらに、関連する資料をあげて、それぞれの沿革も述べた。まだ不明な点も多いが、それは今後の課題としたい。

今回調査した聖地や道観・廟について、関連資料と現況を考え合わせてみることで、六朝時代から現代に至るまでの大きな流れを俯瞰することができた。時代ごとの盛衰や変遷はあるものの、それらに何かしらの宗教的な磁場が存在し続けることにあらためて興味を感じた次第である。

※この調査報告は、科学研究費補助金「道観関連資料を基軸とした明代道教の宗教活動の基礎的研究」（課題番号 16H07170）の成果の一部である。



43 呉越・錢鏐「新建風王  
靈徳王廟記」